

江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の書

オレグ・プリミアニーニ

The calligraphies of early Tōshōgū Shrines 36 immortals of poetry

Oleg Primiani

Portraits of the thirty six immortals of poetry have been depicted on wooden plates to put up on display in Shintō shrines since Muromachi period. Soon after the death of Tokugawa Ieyasu in 1616, Tōshōgū shrines building started at mount Kunōzan and mount Nikkō. The following year, these two shrines were completed and the second shōgun of the Tokugawa dynasty, Hidetada, ordered the production of wooden plates of the thirty six immortals of poetry to adorn their worship halls. Later, several Tōshōgū shrines were built across the country, and wooden plates of the same kind were offered to many of them, following the examples of Nikkō and Kunōzan shrines.

In this paper, I will focus on the calligraphies on the wooden plates of Nikkō Tōshōgū shrine, which were made by emperor Gominō in the Sō no kata style of the Sesonji school.

The purpose of this paper is to make clear all the differences between Nikkō Tōshōgū calligraphies and those contained in a 18th century manuscript copy of the Sesonji school Sō no kata style thirty six immortals of poetry.

一、はじめに

日光東照宮には、江戸初期制作の三十六歌仙扁額（以下、日光本と略称）が伝来している。その制作の経緯について、山作良之氏の研究により次のことが明らかとなった。

制作年は元和三年（一六一七）である。歌仙和歌は、二代将軍徳川秀忠の依頼によって在位中の後水尾天皇の宸翰である。後水尾天皇は、曼殊院門跡を務めていた良恕法親王に相談を持ちかけ、その結果、良恕法親王から借用した資料を手本に歌仙和歌を揮毫したことが判明した¹⁾。

さらに、歌仙和歌本文と書の形態からして、山作氏は後水尾天皇の使用した手本が九州大学付属図書館に所蔵される『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』（以下、世尊寺流「草之形」と略称）に類するものであったとされた。

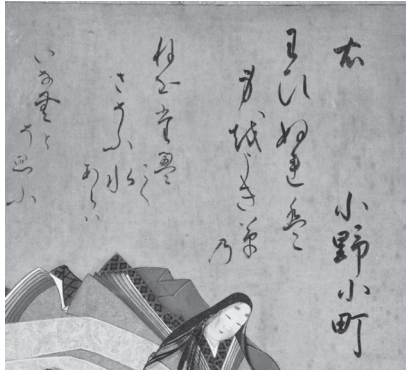
次に日光東照宮歌仙額と「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」の散らし書きの様式を比べると、文字を置く位置やかな遣いが若干異なったり、ひらがなを漢字で書いたりしているところもあるが、各々の句の配置など、様式面においてはほとんど一致する。その様を幾枚かの写真によって見ていただく。上が「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」、下が日光東照宮歌仙額である。他も同様であり、これにより、日光東照宮歌仙額の雛形とされた「世尊寺芳翰」は「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」に類した資料であったことが推測しうる²⁾。

旧稿では、世尊寺流「草之形」の歌仙和歌本文を、日光本を含む江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙和歌本文に照合して、世尊寺流「草之形」と日光本が完全に一致するのみならず、元和七年（一六二一）に制作された水戸東照宮蔵三十六歌仙扁額も同一の歌仙和歌本文を提示することを指摘した。したがって、世尊寺流「草之形」に類するものを祖本とする「日光本系統」の歌仙和歌本文の存在を定位した³⁾。

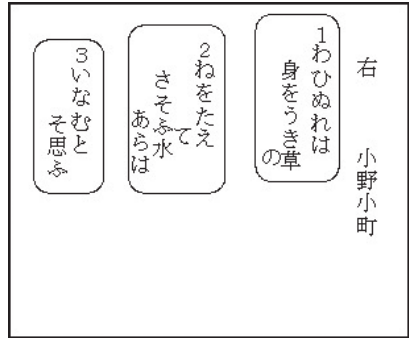
本稿では、世尊寺流「草之形」と日光本の書の形態に着目し、山作氏より指摘されたその「文字を置く位置」の違いを整理することを目的とする⁴⁾。

二、書 の 分 析 方 法

歌仙和歌三十六首のうち、三十首の書は次のように分析することができる。事例に、日光本「小町」の書を次に取り上げる。



【図1】



【図2】

図1は、日光本「小町」の書の影印である。図2は、その翻刻である。

この歌仙和歌の書は、視覚的に三つの文字の塊に構成されている。各塊の間に空間がある。以下、このような文字の塊を「集段」と呼称する。

歌仙和歌本文を辿ると、三つの集段の配置が判明する。

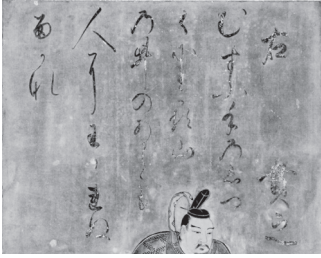
初句と第二句は、最も画面の右側にある集段に集約されている。これは第一集段となる。

次に、第三句と第四句は、画面の中央にある集段に集約されている。これは第二集段となる。

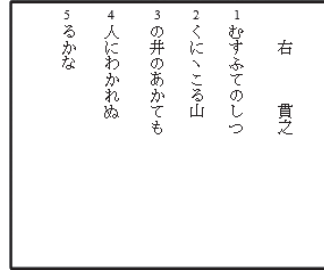
最後に、第五句は、画面の最も左側にある集段に集約されている。これは第三集段となる。

このように、世尊寺流「草之形」と日光本における三十首の書は、いくつかの集段に分析することができるのである。

残り六首の書は、次のように分析することができる。事例に、日光本「貫之」の書を取り上げる。



【図 3】



【図 4】

この歌仙和歌の書は、右から左へと進む五行に構成されている。行間の幅には顕著な差がない。このような書は行単位で分析するのがよいであろう。

次節では、以上の二方法を踏まえた上で、世尊寺流「草之形」と日光本の書における相違点を明確に提示することとする。

三、世尊寺流「草之形」と日光本の書における相違点

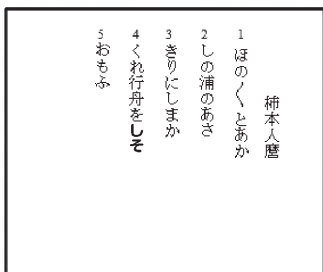
本節では、世尊寺流「草之形」と日光本の書の翻刻を左右対称に掲げ、位置づけが異なる文字をゴチック体で示す。世尊寺流「草之形」が日光本の原型に類するものとされているため、その書の翻刻を左に、日光本の書の翻刻を右に据えることとする。

なお、歌仙名の前に、扁額が拝殿の押上で奉掲される順番に従い、それぞれの位置を示すには「左 1」から「左 18」、また「右 1」から「右 18」までの表記を付する。

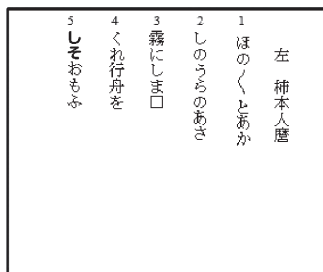
次に、文字の位置づけによる異同が確認できる歌仙和歌十三首の書を詳細に検討する。

左 1 人麿

「ほのほのと あかしのうらの あさぎりに しまがくれゆく ふねをしぞおもふ」



【図5 世尊寺流「草之形」】



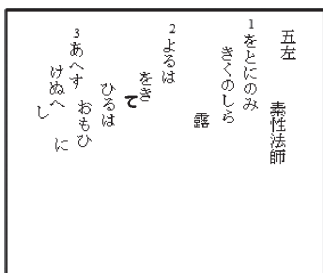
【図6 日光本】

左1人麿の歌仙和歌が五行に書かれている。各行の頭は同じ高さである。漢字仮名遣いに違いがあるにもかかわらず、一行目から三行目にわたって、各行の本文は同じである。

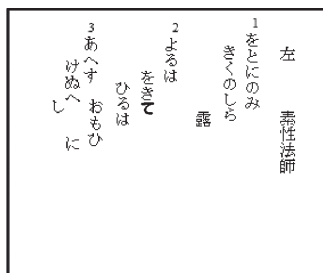
異同は、四行目の末尾、五行目の冒頭にある。世尊寺流「草之形」四行目の末尾「しそ」は、日光本で五行目の頭に送られている。

左5素性

「をとにのみ きくのしらつゆ よるはをきて ひるはおもひに あへず
けぬべし」



【図7 世尊寺流「草之形」】



【図8 日光本】

左5素性の歌仙和歌は、三つの集段に構成されている。

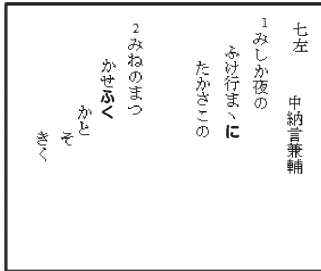
第一集段は初句と第二句、第二集段は第三句と第四句、第三集段は第五句の本文を示す。

第一集段と第二集段の間の余白が著しい。また、第二集段は最も長く、第三集段の下へ流れていく。

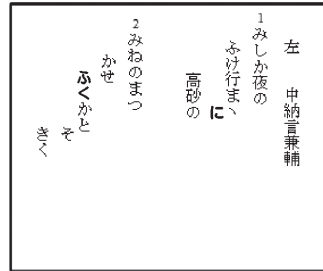
異同は第二集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、第三句「よるはをきて」は三行にわたり、四段活用「をく」の連用形についた接続助詞「て」は三行目を占める。それに対して、日光本では第三句が二行に構成され、接続助詞「て」が「をく」と同じ行に書かれている。

左7兼輔

「みじかよの ふけゆくままに たかさごの みねのまつかぜ ふくかとぞきく」



【図9 世尊寺流「草之形」】



【図10 日光本】

左7兼輔の歌仙和歌はふたつの集段に構成されている。

第一集段は画面の左側にあり、初句から第三句までの本文を記す。第二集段は画面の右側にあり、第四句と第五句の本文を記す。

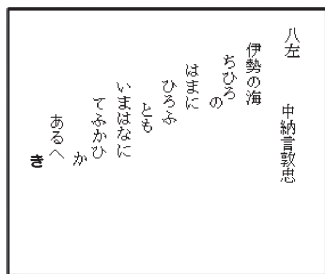
集段の間の余白は著しい。

異同は二点ある。一点目は第一集段にある。世尊寺流「草之形」は三行に作るが、日光本は四行に作り、第二句末の格助詞「に」を三行目に配置する。

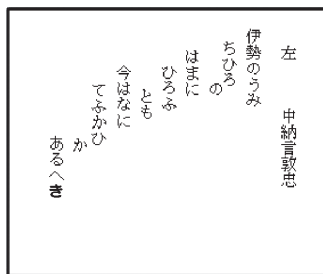
二点目は第二集段にある。世尊寺流「草之形」には、二行目が第四句後半「かぜ」と第五句初頭「ふく」からなる。日光本では、二行目が「かぜ」で切られ、第五句初頭「ふく」は三行目に送られている。

左8敦忠

「いせのうみ ちひろのはまに ひろふとも いまはなにてふ かひかあるべき」



【図 11 世尊寺流「草之形」】



【図 12 日光本】

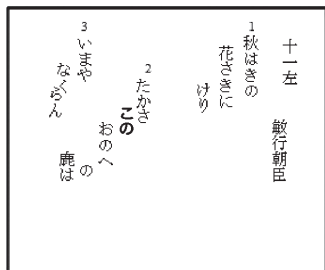
左 8 敦忠の歌仙和歌は、世尊寺流「草之形」において十一行分、日光本においては十行分に構成されている。

行間の幅にはさほどの空間がない。また、行頭の高さはまちまちである。

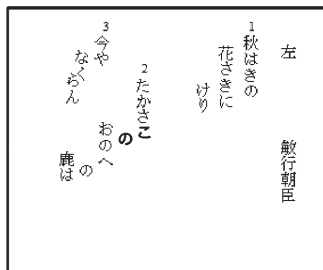
異同は、和歌本文の末尾「あるべき」を記す行にある。世尊寺流「草之形」では、最後の一字「き」が改行されて、十一行目となる。一方、日光本では、「あるべき」が切断されず、十行目に収まっている。

左 11 敏行

「あきはぎの はなさきにけり たかさごの おのへのしかは いまやなくらむ」



【図 13 世尊寺流「草之形」】



【図 14 日光本】

左 11 敏行の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。

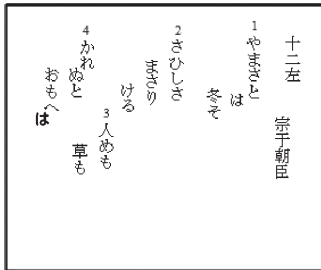
第一集段は三行からなり、初句と第二句の本文を示す。第二集段は五行からなり、第三句と第四句の本文を示す。第三集段は三行からなり、第五句の本文を示す。

第一集段は紙面の右上、第三集段は紙面の左上に置かれ、第二集段は中央から左下へと、第三集段の下に流れていく。

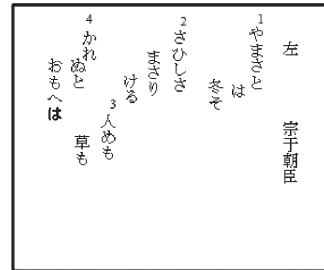
異同は第二集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、第二集段一行目は「たかさ」となっており、二行目はその続き「ごの」を示すため、「たかさご」といった歌枕が切断され、二行に跨がる。それに対して、日光本では、第二集段一行目が「たかさご」となっており、二行目は格助詞「の」のみを記す。

左 12 宗子

「やまざとは ふゆぞさびしさ まさりける ひとめもくさも かれぬとおもへば」



【図 15 世尊寺流「草之形」】



【図 16 日光本】

左 12 宗子の歌仙和歌は四つの集段に構成されている。

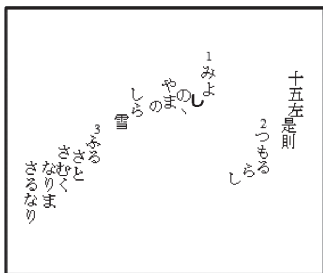
第一集段は紙面の右上に置かれ、三行からなる。第二集段は紙面上段の中央に置かれ、三行からなる。第三集段は第二集段に続いて紙面の左下に置かれ、二行からなる。最後に、第四集段は紙面の左上に配置される。

また、第一集段は初句から第二句初頭「冬」まで、第二集段は第二句と第三句、第三集段は第四句、第四集段は第五句の本文を示す。

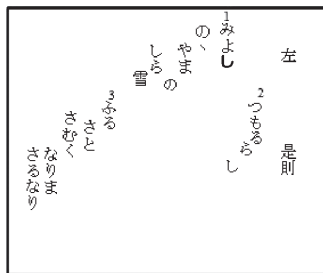
異同は第四集段にある。世尊寺流「草之形」では、第四集段が四行からなり、第五句末の接続助詞「ば」を四行目に配置する。それに対して、日光本では第四集段が三行からなり、第五句末の接続助詞「ば」が本動詞「おもふ」に繋がっている。

左 15 是則

「みよしのの やまのしらゆき つもるらし ふるさとさむく なりま
さるなり」



【図 17 世尊寺流「草之形」】



【図 18 日光本】

左 15 是則の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。

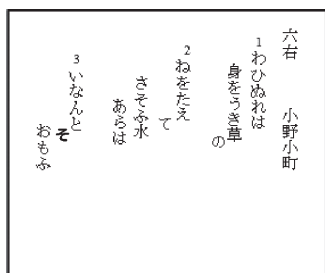
第一集段は紙面の中央を占め、第二集段は右下、第三集段は左下に配置される。

第一集段は初句と第二句、第二集段は第三句、第三集段は第四句と第五句の本文を示す。

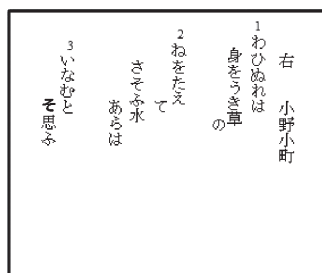
異同は第一集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、初句「みよしのの」は三行にわたり、二行目は「みよし」の「し」一字からなる。それに対して、日光本では初句が二行にわたり、「みよし」は切断されずに一行目に収められている。また、日光本では第一集段二行目「のの」は、世尊寺流「草之形」第一集段三行目「のの」より高く配置されている。

右 6 小町

「わびぬれば みをうきくさの ねをたえて さそふみずあらば いなむ
とぞおもふ」



【図 19 世尊寺流「草之形」】



【図 20 日光本】

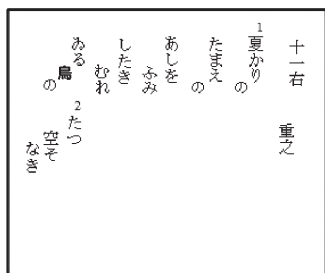
右 6 小町の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。

第一集段に従い、第二集段と第三集段は右から左へと並列されている。第一集段は初句と第二句、第二集段は第三句と第四句、第三集段は第五句の本文を示す。

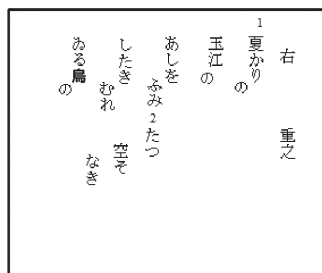
異同は第三集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、第三集段が三行からなる。一方、日光本では、二行からなる。つまり、世尊寺流「草之形」において第三集段二行目を占める格助詞「ぞ」は、日光本において次の行頭に置かれたのである。

右 11 重之

「なつかりの たまへのあしを ふみしたき むれゐるとりの たつそらぞなき」



【図 21 世尊寺流「草之形」】



【図 22 日光本】

右 11 重之の歌仙和歌は二つの集段に構成されている。

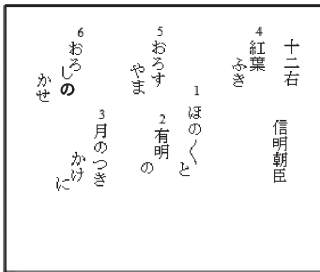
第一集段は紙面上段を右端から左端まで行きわたっている。この右 11

重之の第一集段は、世尊寺流「草之形」と日光本において、独特な構成を見せている文字集段である。第二集段は紙面の左下に配置される。また、第一集段は初句から第四句までの本文を示し、第二集段は第五句の本文を示す。

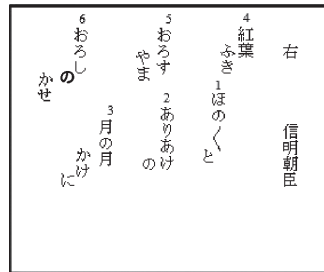
異同は第一集段にある。世尊寺流「草之形」ではこれが十一行からなるのに対して、日光本では十行目「鳥」が前行に詰められている。したがって、日光本の第一集段は全体で十行になっている。

右 12 信明

「ほのほのと ありあけのつきの つきかげに もみぢふきおろす やま
おろしのかぜ」



【図 23 世尊寺流「草之形」】



【図 24 日光本】

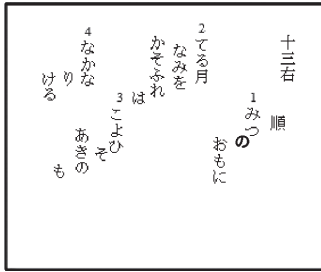
右 12 信明の歌仙和歌は六つの集段に構成されている。

第一集段から第三集段までの三つは、右から左へと紙面の下段に配列される。第四集段から第六集段までの三つは、右から左へと紙面の上段に配列される。果たして、上の句と下の句が上下二段に配置されていることになる。

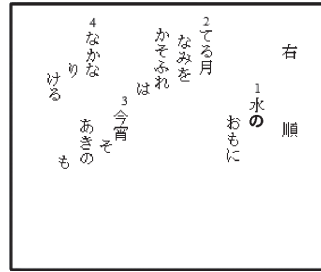
異同は第六集段にある。世尊寺流「草之形」では、これが三行分からなり、二行目は「しの」二字を記す。一方、日光本では二行目が「の」一字となり、「し」一字が全行に送られている。

右 13 順

「みづのおもに てるつきなみを かぞふれば こよひぞあきの もなかなりける」



【図 25 世尊寺流「草之形」】



【図 26 日光本】

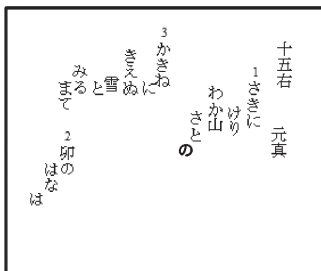
右 13 順の歌仙和歌は四つの集段に構成されている。

第一集段は紙面の右側に置かれる。第二集段は紙面中央の最も上に配置され、第三集段は第二集段の末尾から始まり紙面の左下へと流れる。第四集段は紙面の左上に置かれる。また、第一集段が初句、第二集段が第二句と第三句、第三集段が第四句と第五句の前半、第四集段が第五句の後半を示す。

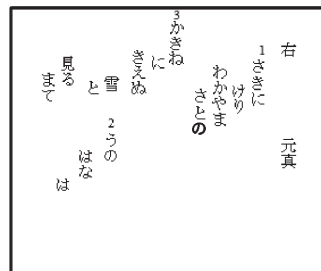
異同は第一集段にある。世尊寺流「草之形」では、第一集段が三行からなり、二行目が格助詞「の」一字からなる。一方、日光本では二行からなり、格助詞「の」が一行目の末に配されている。

右 15 元真

「さきにけり わがやまざとの うのはなは かきねにきえぬ ゆきとみるまで」



【図 27 世尊寺流「草之形」】



【図 28 日光本】

右 15 元真の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。

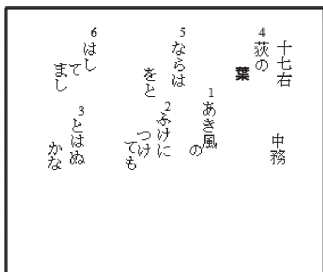
第一集段は紙面の右側、第二集段は紙面の左下に配置される。第三集段は

中央上段から始まり、紙面上段の左側まで長く流れている。第一集段末尾と第二集段冒頭の間の余白が著しい。

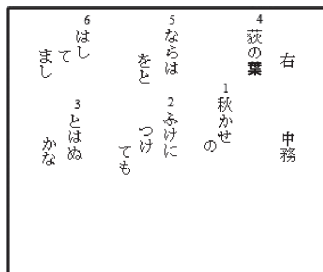
異同は第一集段にある。世尊寺流「草之形」では、第一集段が五行からなり、五行目が格助詞「の」一字からなる。一方、日光本では、これが四行からなり、格助詞「の」が四行目の末に配されている。

右 18 中務

「あきかぜの ふけにつけても とはぬかな おぎのはならば をとはしてまし」



【図 29 世尊寺流「草之形」】



【図 30 日光本】

右 18 中務の歌仙和歌は六つの集段に構成されている。

第一集段・第二集段・第三集段は紙面の下段、第四集段・第五集段・第六集段は紙面上段に配置される。また、第一集段が初句、第二集段が第二句、第三集段が第三句の本文を示す。第四集段は第四句前半、第五集段が第四句後半から第五句前半まで、第六集段は第五句後半の本文を示す。

異同は第四集段にある。世尊寺流「草之形」では、第四集段が二行からなり、二行目が「葉」一字からなる。それに対して、日光本では、これが一行からなり、「葉」一字が次行に送られていない。

以上の異同は、次のように整理することができる。

表1 世尊寺流「草之形」と日光本における書の異同

番号	歌仙名	異同の位置	番号	歌仙名	異同の位置
①	左1 人麿	四行目・五行目	⑧	左15 是則	第一集段
②	左5 素性	第二集段	⑨	右6 小町	第三集段
③	左7 兼輔	第一集段	⑩	右11 重之	第一集段
④	左7 兼輔	第二集段	⑪	右12 信明	第六集段
⑤	左8 敦忠	十行目・十一行目	⑫	右13 順	第一集段
⑥	左11 敏行	第二集段	⑬	右15 元真	第一集段
⑦	左12 宗子	第四集段	⑭	右18 中務	第四集段

以上は、山作氏より指摘された「文字を置く位置」による異同十四例であると考えられる。

表1から、これらの異同を二種に分類することができる。

第一に、歌仙和歌本文をいくつかの集段に構成する書に見られた十二例の異同がある。これらすべては、文字の位置による異同が集段中に起きたものである。

第二に、行間の幅には顕著な差がなく、行単位で分析した書における二例の異同がある。これらは、和歌本文の末尾に起きた異同である。

四、むすび

徳川家康が没した元和二年の翌元和三年（一六一七）、二代将軍徳川秀忠の依頼に応じて、後水尾天皇が日光東照宮に奉納する三十六歌仙扁額に筆を染めた。その染筆方法に関しては、当時、入木道の権威であった叔父・良恕法親王に相談を受けてから、世尊寺流に伝わる資料を手本にした。

山作氏は、九州大学附属図書館に所蔵される『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』と日光本の比較検討のうえで、後水尾天皇の使用した資料が世尊寺流「草之形」の三十六歌仙を提示するものであったとされた。一方、歌仙和歌本文が完全に一致するのに対して、書の形態においては「文字の位置」による異同が見られると指摘された。

本稿では、日光本と『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』の書を再検討し、その「文字の位置」による異同十四例が確認できた。そのうち、大半は文字

集段の中に起きた異同であると判明した。

このような異同が起きた場合でも、世尊寺流「草之形」と日光本とでは、集段に収まる歌仙和歌本文、及び集段の配置には変化がない。この現象は、山作氏より指摘された「各々の句の配置など、様式面においてはほとんど一致する」ものと思われる。

【注】

- 1) 山作良之「日光東照宮蔵三十六歌仙扁額製作の経緯」（『大日光』第七十九号、二〇〇九年三月、日光東照宮）
- 2) (2) 前掲論文。
- 3) 拙稿「江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙和歌本文—日光本系統と久能山本系統を中心に」（『水門』第二十六号、二〇一五年十月、勉誠出版）
- 4) 日光本の書においては、いわき明星大学教授・田嶋一夫氏を介して、日光東照宮宝物館・山作良之氏よりいただいた画像に拠った。なお、世尊寺流「草之形」の書は、国文学研究資料館に保管されるマイクロフィルムを使用させていただいた。